

内外彙報

は附隨淘汰の或種類、或は獨立淘汰を生ずる變化の或種類なり。

モリッツ、ワグネル氏の説と余の説とは當初より離れ居れり。

モリッツ、ワグネル氏は、其著「生物移住の法則」に於て、進化の源因として地理上の離隔の頗る必要なるを初めて説きたり、然れども氏は地理上の離隔無ければ、自然淘汰は新種を形成するに當つて毫も力を振ふを得ずと云へるを以て、氏の言ふ處は、事實の示す處を超へたる者と云ふべし、余の説は、氏の以後四年を経る迄、確然たる主張を含まざりしと雖も、氏より受くる智識無くして到達せる所の者にして、此の故に氏の述べたる全然の離隔より知れるにはあらず、而して氏の論と、余の論とを比較するに、兩者全く異なるを見るを得べし。

千八百六十八年三月に於て、モリッツ、ワグネル氏はミューンヘンの王立理學専門學校に於て「生物移住の法則」に就て一論文を演述せり、而して千八百七十三年に氏の親ら英譯して「ダーウィンの説及び生物移住の法則」と標

題せる書物倫敦のエドワード、スタンホードより出版せり、此の書を見て、初めて余は氏の論旨即ち「移住によつて、地理的に原種と離隔せずんば、新種を形成するを得ず」と稱する説を窺知するを得たり、氏の論文に於て余は「生物は其種類の住める所より漂游するの性ある事、新變種新種の形成に全く必要なり」との事を見たり（氏の論文第四頁）、氏曰漂游なくんば、即ち離隔したる團體の生ぜざる所には、自然淘汰は發生せず（氏の論文第五十九頁）と是と同一の意義を示せる其他種々の氏の文章を見れば、氏が如何に離隔の必要を認め、是と同時に氏の説が、當時の種類起源の論を證する或事實に反せるを知るを得べし、氏の論及び説明と反せる事實の二三を次に掲ぐべし。（未完）

（田中茂穂譯）

寄生蟲學

●人體に寄生する馬蠅の幼蟲 馬蠅の幼蟲が

人體の皮膚に寄生する事あるは千八百九十五年露國人に發見せられ記載せられしを嚆矢とす然れども當時は此が

報告たる Sanison 及 Isokolow 兩博士も共にその馬蠅の幼蟲なる事を知らず只に一小蟲として記述せり翌年に至り Cholol Koviky 博士其の標本につき研究し全く馬蠅の幼蟲なる事を發表したり、後 Porschinsky 氏二種の *Gastrophilus* 幼蟲を人體に發見し其後數月にして Choloikovsky 氏は又同幼蟲に似たるものを *Eserwirog* 氏より受取り此等を合せ千八百九十六年に報告したり爾來他の報告少く從つて馬蠅の幼蟲が人體に寄生する事を確認せざるものさへありき昨千九百〇七年に至り Boas 氏又人體に寄生する馬蠅の幼蟲を報告し本年八月 Choloikovsky は前年(千八百九十六年)記載したる標本の寫真版を挿入し以て從來世人に疑はれし迷を解けり。

而して氏は該幼蟲が如何にして人體の皮膚に入り來るやにつき前説(千八百九十六年)を繰返せり、即ち左の如し。

牛蠅科の幼蟲が如何にして動物及人體内に入るかと言ふ問題につき今迄普通に唱へられ教科書等にある説は牛馬が其の皮膚面を匍ふ幼蟲の爲めに一種の刺戟を受け此を舐食するが故に牛馬の體内に入るものなりとせり此れ

内外彙報

有名なる英國の獸醫 Clark 氏により唱道せられしものにして氏は千七百九十七年の昔既に此事を記述せり然れども當時の説は牛馬の蠅が其卵を牛馬の舌の達すべき前肢頸部等に産み付け其の卵を牛馬が舐食するものなりと稱せしも其は卵を舐食するにあらずして皮膚を匍ひ廻る幼蟲を舐食すと訂正したり又牛馬が他の牛馬の皮膚を舐め此等の幼蟲を嚥下し寄生蟲を得る事ありと言ふ。

此の氏の此説は一般に承認せられたるが如きも或る學者例へば Brauer の如きは牛蠅科のモノグラフに説て曰く馬は自から舌を以て皮膚を舐めること甚だ稀なり故に馬蠅の幼蟲は馬の舐食を待たず自から進むで馬の鼻腔口腔内に匍入るにあらずやとそれ或は然らん。

Choloikovsky 氏は謂へらく卵より發生したるが如き微小の幼蟲が馬の皮膚又は毛に這ひ廻りたりとて烈しき痒痛を起し牛馬をして其の痒き場所を舐め痒感を癒せしむる程に至るとは思はれずと而して斯る痒痛を起すは幼蟲が單に皮膚又は毛の上を這ふにあらずして皮膚内に食込むにはあらずやとは誰にも考へ得らるゝ事なり、人體

内外彙報

の如き毛の少き皮膚にありては其の食込まれたる孔を見出す事容易なれども馬の如く毛深き皮膚にありては其の孔を見落す事決して無理ならぬ事なり、馬は幼蟲を舐むるにあらず痒き場所を齒にて咬み幼蟲を押し出し此を嚥^エ下するならん、疥癬の如き他の皮膚病に犯されたる時に馬が齒にて其痒き部を咬む事は廣く知られたる事實なれば皮膚内に潜む幼蟲の刺戟により皮膚を咬むべしとは最も信じ易き説なりと言ふべし、若し此説を眞なりとし用ふれば容易に説明し得べき事ありそは極めて稀に發見せらるゝ人體の胃内に於ける馬蠅幼蟲の由來なり即ち此の胃内の幼蟲は人體の皮膚内に潜みしものを患者が爪又は齒にて掻き出し此が偶然口に入り遂に胃に進みしものなり以上述べたる[○]氏の説は眞なるべきも此を實際に徴し後其の眞疑を決するに如かず而して此か實驗をなすには醫師及獸醫に取りては左程困難の事業にあらざるべし。

[○]氏の此の説か馬に實驗せられし結果は未だ一も報告せられずと雖此説の眞なるは昨年 Portschinsky 氏が發

表せし論說中に全く前の[○]氏のを知らずして偶然同一の決論をなせり即ち馬蠅の幼蟲は卵より出で馬の口に入る前に先づ馬の皮膚に食込み種々の孔を生ずと言へり、此れにより吾人は牛馬の蠅の幼蟲が如何にして動物及人體内に入るかを知り得るなり。
(吉田貞雄)

●人體條蟲の一新種 Leon 博士は千九百〇五

年に得たる條蟲なりとて人體に寄生する一新種を發表したり此は一鐵道吏員より得たるものにして、極めて稀なるものの如し、體は帶狀にして多肉長さ十八センチ巾十二ミリの大きに達す外部には節片の區界明ならざれども内部は數多の生殖器により區分せらる體の後端は前端より廣く前端の頭部は三角形をなす吸盤は弱小にして頸部なし、背腹共に中央線に沿ひ縦走する凹陷部あれども腹部のもの稍々深し、横斷面を見るにクチクラ層は比較的厚く其表面微かなる條^{スヂ}を備ふと雖他の條蟲に見るが如き管孔なし、クチクラ層の内部には周緣筋肉系あり其の發達遙かに内部筋肉系に及ばず、周緣筋肉系はクチクラの直下にある縦筋と其の下にある輪筋と更に其内部に